School Correspondence

広報版

信濃小中学校だより そよげわか竹

お米を作ってお餅を食べよう

昨年度、四年生が育てたお米で作ったおいしいお餅をいただきました。お礼の手紙に「今度は僕たちがお餅を作ります。」と書いていた子どもたち。（四年生になったらお米作りをするんだ。）と先輩の姿を見ていて思っていたようです。

しかし、聞いてみると田植え・稲刈りの手伝いをしたことがある子は二～三割ほどでした。やってみたいという願いは持っているものの実際にどんな手順でやったらいいのかわからないという実情でした。そこで一年間の稲作に関する作業を地域の方や保護者の皆さんにご指導お手伝いいただきながら作業を進めてきました。

温湯消毒も体験

籾一粒無駄にするとお茶碗一杯分のお米を無駄にすることになると聞いて慎重に作業を進めました。

田おこしも、鍬やスコップを使いながらやってみたものの「ふう、つかれたあ。」とバテ気味。しかし、信濃町の子どもたちはよく働きます。

なかなか進まない田おこし

それでも、協力者の方にトラクターでおこしてもらうと「あんなに時間がかかったのに機械は速いなあ。」とびっくり。やってみて苦労がわかったからこその感想でした。

田植えがすむと毎週、草取りに取り組みました。田植えのときは土の感触に「気持ち悪い。」と悲鳴をあげていた子どもたちでしたが三回の草取りを通して慣れてくると、どんどん進みました。「土をこちょこちょするように。」というアドバイスをいただきながら小さな草をとりました。草が伸びてきても、苗との違いもわかるようになり、手にはたくさんの草を持っていました。おかげで除草剤を使わずに稲作りができました。

毎日の水止めも頑張りました。子どもたちだけではできない草刈りや稲熱病対策、水かけの判断や水回りなど様々な作業も協力者の方に見えないところで支えていただきながら稲は育っていきました。

とってもとっても草は生える

稲刈りでは、多くの保護者の方に協力していただいて稲を刈ったり、はぜかけをしたりしました。途中で稲刈り機が不調になるというアクシデントもありましたが、信濃町の子どもたちはよく働きます。さらに「ここまで育ててきた稲を自分たちの手でお餅にするんだ。」という気持ちも感じられました。子どもたちだけでほとんどを時間内に刈ってしまいました。

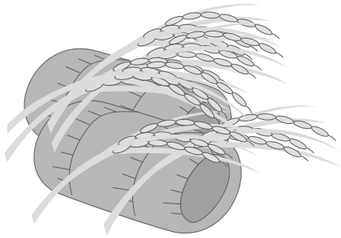
ザクザクの感触を楽しみながら

「うわっ吸い込まれそう！」

脱穀では、地域の方に千歯こき、足踏み脱穀機、ハーベスターを貸していただくことができました。昔の道具を使いながら、それぞれのよさや大変さを実感した子どもたちでした。「千歯こきは数本ずつやらないと抜けないことがわかった。」「足踏み脱穀機は、吸い込まれそうでこわかった。」「ハーベスターは入れるだけであとはみんな機械がやってくれて楽だった。」とそれぞれを体験できた喜びとともに感想を述べていました。

この間、春と秋に水辺の生き物について「アファンの森財団」の方に教えていただきました。信濃町には生き物が棲みやすい豊かな自然が残っていることを学びました。

待ちにまった収穫祭



いよいよ収穫祭。「自分たちが作ったお米でお餅を作って食べたい。」「お世話になった方々を招いて感謝の気持ちを伝えたい。」

「よいしょっ！よいしょっ！」気持ちを揃えてみんなで餅つき

「今までやってきたことをみんなに伝えたい。」そんな願いを持って計画を進めました。

当日は、声を揃えて餅をつき、あんこやきなこをまぶしました。何をするのも「友だちと一緒に」「自分たちでやる」というのはとても楽しそうでした。この日のために、感謝の気持ちの伝え方や活動を伝えるための方法を考え、追究していきました。

お世話になった方々を招いていよいよ会食

お家の方のアドバイスを聞きながらあんこをつけました「おいしいかな」

自分たちが体験してきた稲作活動の様子を歌や劇、クイズ、スライドと解説で皆さんに伝えていきました。

保護者の方の協力を得ておいしいお餅ができ、自分たちの活動の成果を改めて確認した子どもたち。楽しいひとときを過ごすことができました。

たくさんとれたお米は給食センターの協力を得て、全校に「甘納豆おこわ」としてふるまうことができました。子どもたちの発案で東北大震災の被災地にも送りました。また、保護者の方にも買っていただき、そのお金の使い道を検討中です。

稲刈りの様子を寸劇で発表

自分たちで育てたお米、大事なお米の使い道を最後までしっかり考えていきたいと思います。

お世話になった方にお礼の気持ちを伝える

農産物検査員の資格を持つ地域の方から一等米のお墨付きをもらいました